

本書は『アジア人物史』の総監修という得難い体験の中から生み出された「アジア的なもの」への私の実人生的な感慨であり、また未来へのメッセージでもある。ただし、それは単なる「アジア回帰」でもなければ、手垢にまみれた「アジア主義」の季節外れの復権の試みでもない。むしろ、「アジア的なるもの」を潜り抜けることで見えてくる新しい世界と人間の見方に対する、希望の表明である。

戦争と虐殺の苦渋に満ちた世紀の半ばに生まれ、今も「終わらない戦争」（朝鮮戦争）の終結を願う我が身を振り返ると、アメリカの歴史家バーバラ・W・タックマン（一九二〇―一九八九、第一次大戦の顛末を詳細に描いた名著『八月の砲声』でピューリッツァー賞を受賞）のいう「幻滅」ではなく、「希望」こそが依然として私たちに残されていると信じざるを得ない。

もちろん、そうした希望が、再び、幻滅に豹変してしまふことがないと断言はできない。しかし、それでも希望の余地が残されていると思うのは、冷戦終結以後の「アメリカン・スタンダード」としての自由市場経済の「グローバル・スタンダード」が、一九九〇年代の世界的な危機を通じて、結局「マルクスが正しかった」と言えるような事態をつく

りだし、資本主義が自らを改革する機運を醸成させているからである。

ファシズムや共産主義などの政治的な脅威は、資本主義が自らを刷新し、改革する動機づけとなり、アメリカはそのフロントランナーであることで絶大な覇権を維持してきた。

だが、ソ連邦崩壊から三〇年、覇権国家アメリカがユニラテラリズム（単独行動主義）を謳歌し、すべての道はワシントンに通じると豪語できるような「デモクラシーの帝国」になったと思ったとき、それまで経験したことのない手強い政治的な脅威が成長していることに気づかざるを得なくなった。「アジア的」としか言いようのないような「異形の」資本主義大国・中国の台頭である。この事態は、冷戦終結以後の放任型の資本主義と自由民主主義の永続的な勝利という多幸症的な思い込みを粉碎することになった。

巨大な政治的脅威の台頭を前に、否応なしにサミュエル・ハンチントン（一九二七～二〇〇八、アメリカの国際政治学者）が主張したような「文明の衝突」の危機感が再び高まり、地政学的な対立は「西欧的なるもの」と「アジア的なるもの」、さらには「普遍的な価値観」と「特殊な価値観」との相克を際立たせることになった。ロシアのウクライナ侵攻は、こうした対立の構図にリアリティを与えることになったのである。

それでも辛うじて、第一次世界大戦を凌駕するに違いない世界的な破局への歯止めが利かなくなっているわけではない。「核戦争の恐怖」がその最後の防波堤になっているのである。それは、タックマンが描いた「幻滅」が空前の規模で世界を覆うに違いないという確信のようなものが、多くの国々で共有されているからではないだろうか。

確かに、その歯止めがいつ壊されるかもしれないという、危うい綱渡りを強いられていることは否定できない。ただ、それにもかかわらず、現在の地球的規模の危機が「西欧的なるもの」と「アジア的なるもの」、「民主主義」と「専制主義」、「普遍的な価値観」と「特殊な価値観」の相克として単に捉えられるのではなく、資本主義に内在する欠陥をいかに克服し、生態系の危機をいかに乗り越えていくのかにかかっているということについて、共通の認識が生まれ、分かち合われるのであれば、「幻滅」の代わりに「希望」が芽生えてくるかもしれないのだ。

目次

第一章 近くて遠いアジア

「アジア」との出会い

「アジアの代表」「先進国」の日本

「大塚史学」との出会い

「人間類型」の吸引力

「土地史観」と「帝国の平和」

近代日本のアポリア（難問）

フィクションとしての「アジア」

アジアの前にあったふたつの道
今に続くアジア理解のパラダイム

第二章 西欧とアジアの二分法を超えて

「寺子屋」での体験

ドイツへの「エクソダス」

アジアに対する日本人の序列意識

コロナ禍が招いた現代版「黄禍論」

重層的なヨーロッパの人種差別

イスラームとの出会い

アジアを見るときの四つの論点

ウォーラーステインによる「解毒」

サイドとウォーラーステインの問題意識

「普遍」をめぐる対立

「アジア的なるもの」とナショナリズム

アジアと冷戦の二〇世紀

第三章 地域主義と「東北アジア共同の家」

「戦火のアジア」八〇年

「パックス・ジャポニカ」はなぜ可能だったのか？

「グローバリズム」対「ナショナリズム」、中国の台頭

バツファーとしての「地域主義」の可能性

「東北アジア共同の家」という理想

金大中が練り上げた「日韓連携」

東アジア共同体への動き

「太陽政策」が生んだ南北融和

北朝鮮問題と多国間の枠組み

五カ国の外交官の共通認識

近づいては遠のく和平

未発の可能性としての「東北アジア共同の家」

異質なものと共存する

第四章 個別的「普遍主義」の可能性

——西欧とアジアの「認識論的・存在論的分断」を超えて——

アジアから生まれる新たな「普遍」

熊本という郷土（パトリ）

「パトリ」の再発見

岸信介、吉田松陰と横井小楠

「天地公共の実理」と儒教の「道」

「実学」のその後

日本とアジアの「認識論的・存在論的分断」

日本はなぜ「普遍」を生み出せなかったのか

近代日本の未発の可能性

おわりに

208

参考文献

215

本書には現代では差別的とされる用語・表現が含まれますが、これは当時の文献等の記述に基づくものです。時代の言説を理解する上で重要な手がかりと捉え、修正や言い換えは原則行っておりません。

第一章 近くて遠いアジア

「アジア」との出会い

振り返ってみれば、物心ついたころから、歴史の授業が苦痛だった。日本史では「三韓征伐」や「朝鮮出兵」、さらに「征韓論」や「韓国併合」といった言葉が私の心を暗くした。歴史の教科書では、私の記憶する限り、韓国や朝鮮が歴史を動かす独立の単位として登場することはなく、常に中国と日本の「付属」か「従属」的な存在として扱われていたからだ。

しかも、私の生まれた年（一九五〇年）に勃発した同族相残の「内戦」（朝鮮戦争）が、教科書では先行する歴史的な脈絡もなく突如として登場し、その唐突感で私の中に、父母の国の存在そのものがトラブルの元凶であるという先入観が定着してしまった。誇るべき文化も、継承すべき歴史もなく、歴史の波間で木の葉のように翻弄される弱小国。これが、韓国あるいは朝鮮（半島）という国のイメージだった。それは、帰するところ、「懦弱」（だじやく）な民族性に由来していると思われたのである。

自分とそのルーツを見つめる内面の眼めにしたたり落ちる黒い汚点、それが韓国・朝鮮で

あり、「アジア」に他ならなかった。そのような眼差しが、「尊大に構え、蔑むような無知のマントに偉そうにくるまっている」（アレクサンドル・ゲルツェン『向こう岸から』長縄光男訳、平凡社ライブラリー）自らの傲慢さのネガであることを知るのに一〇年近くの歳月を要したのである。

その間、私は書籍的な知識を通じて歴史を学ぶだけでなく、「韓国系」の学生団体に入りし、日本と韓国、北朝鮮、さらに「在日韓国・朝鮮人」を串刺しにするようなアクチュアルな問題の渦中に身を置き、過去の歴史と現代とが衝突して火花を散らす現場を体験することになった。

知識としての歴史と、身体的な感性を通じた歴史——過去が生々しいアクチュアリティに触発されて現在に蘇り、また無定型でさまざまな可能性を孕んだ現在が歴史の溶鉱炉に溶かされて過去と結びつく。そうした「過去」と「現在」との動態的な関係に目覚めることになったのである。

そして、一九八〇年代の半ば、留学先の旧西ドイツから帰り、埼玉県のある町に居を構え、大学で教鞭をとるようになったころ、日本はバブル経済のとは口に立っていた。一

九八五年、いわゆるプラザ合意（米・英・仏・日・西独の先進五カ国の蔵相・中央銀行総裁会議 G5 によるドル高是正のための為替協調介入に関する合意）で、日本は円高の時代に突入し、ジャパン・マネーが世界を席卷する始まりとなったのである。

この年の一年前、新札が発行され、一万円札の肖像が福澤諭吉になり、明治時代の優れた啓蒙家、福澤諭吉は経済大国の事実上の「顔」になった。

草創期の明治国家の最大の対外的な懸案が「征韓論」であり、隣国の李朝朝鮮との関係は近代国家・日本にとって、アジアとの関係を占う試金石であったことはよく知られている。そしてプラザ合意から一〇〇年前の一八八五年（明治一八年）、当時の「時事新報」に無署名の社説として発表されたのが、福澤の「脱亜論」である。

「脱亜論」から一〇〇年の歳月を跨いで福澤諭吉が日本の「顔」に選ばれたということは、その間の一〇〇年が、「事実上の脱亜」の歴史だったことを示唆している。

確かに福澤が、「脱亜論」で、「アジア東方の悪友」、朝鮮と「支那」との「謝絶」を露骨なほどに主張した背景には、福澤なりの切迫した国際情勢に関する認識があった。

「文明の普遍性」に門戸を閉ざし、「古風旧慣に恋々する」朝鮮や「支那」に期待をし、

連帯を呼びかけても、むしろ一蓮托生^{いちれんたくしょう}、日本も朝鮮や「支那」のように衰微し、亡国の道を行んでいくことになりかねない。日本だけは断じてその轍^{てつ}を踏んではならない。そのためには隣国だからといって「特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に從つて処分すべき」である——。これが福澤の「脱亜論」の骨子である。

こうした外交的なレトリックすらもかなぐり捨てた、容赦ない (without mercy) 隣国に対する「切り捨て御免」のロジックは、日清戦争以前の弱国、日本の国際的な劣位に対する福澤の痛切な危機感が発条になっていた。その意味で福澤の「脱亜論」は、変化する国際情勢と時代の脈絡を抜きにしては語り得ない。

しかしそれでも、福澤の「脱亜論」的なアジア認識が、日清戦争以後の日本の「事実上の脱亜」としての帝国主義的——覇権的なアジア認識へと連続していたことは否めない。なぜなら、「欧化主義的な」「文明の普遍性」を尺度とする文明——半開——野蛮の価値のヒエラルキー (序列) は、「事実上の脱亜」を通じて連綿として現代まで継承されてきたからである。

そのことがよくわかるのは、たとえば社会学者の栗原彬が『歴史とアイデンティティ』

(新曜社)で取り上げている、米軍占領下の一九五一年に文化人類学者の泉靖一いずみせいいちによって行われた「東京小市民の異民族に対する態度」という世論調査だ。「世界中でどの民族が好きで、どの民族が嫌いか」という問いに対して「好き」という回答が多かったのは、上位からアメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人であるのに対して、「嫌い」の筆頭は「朝鮮人」、次いでロシア人であった。

朝鮮戦争が勃発して間もなく、戦後からの「第三国人」への反発もあつたと思われるが、戦後日本の心理的な世界地図、あるいは「心象地理 (imaginative geography)」は、地理的な距離と反比例して近くのアジアに対して否定的、遠くの欧米に対して肯定的なイメージに彩られていたのである。

「暗い、陰鬱いんうつ、卑屈、汚い、田舎臭い、貧しい、惨め、あわれ、怖い、恐ろしい、劣る、遅れている、野蛮、非文明国……」。こうした近隣のアジア諸国に対する否定的な「心象地理」の語彙は、敗戦を跨いで明治、大正、昭和と続く「事実上の脱亜」の歴史によって成型されてきたと言える。

「アジアの代表」「先進国」の日本

今ではひとり当たりGDP（国内総生産）で日本を追い抜きつつある韓国だが、軍事独裁政権下の一九七二年、私が初めて韓国を訪れたとき、ソウルで目にした物乞いをするストリートチルドレンの襤褸ぼろをまとった姿には衝撃を受けざるを得なかった。父の故郷、キョンサンナムド慶尚南道馬山マサンの農村には電気も通っておらず、祖母は藁葺わらぶき屋根のボロボロの土壁の家で暮らしていた。貧困の「生きた標本」、それが私のルーツの姿に他ならなかった。「枯死朝鮮」、朽ちていく「老国」というイメージの「生きた見本」を実見する思いだった。そのみすぼらしい「停滞」した社会の風景は、幼い時代の「在日」の原風景が生命を吹き込まれて目の前に蘇っているような錯覚を与えた。そして韓国社会は、巨大な「在日」に見えたのである。

しかし、他方、社会の表層の停滞と貧困にもかかわらず、その深部でダイナミックに渦巻く混沌こんとんのエネルギーの熱量に心を揺さぶられ、私の中で父母の国のふたつの姿が闘たたかぎ合っていた。それは、「アジア」という言葉によって思い浮かぶアンビバレントな感情を代弁していた。

これに対して日本だけは、唯一「例外」のように思われた。一九七五年の第一回サミット（先進国首脳会議）に参加した日本のキャッチフレーズは「アジアの代表」「アジアで唯一の先進国」であった。日本は「遅れたアジア」の輝ける「代表」であり、同時に欧米「先進国」と肩を並べる存在として、アジアと欧米をつなぐ「結節点」に位置する希有な国とみなされていたのである。

日本はアジアの「停滞」と「発展」を測るメジャー（尺度）、「参照系」になったのだ。「日本的」であることが、アジアという広域的な空間の「スタンダード」になり、平たく言えば、「日本的」であることが、「近代的」であることとシノニム（同義語）の関係にある「普遍化」された記号として通用するようになっていた。

とりわけ、先進国首脳会議に先んじて開催された、アジア最初の万国博覧会（一九七〇年に大阪府吹田市の千里丘陵で開催された国際博覧会EXPO'70）の画期的な成功によって、アジアの多くの国々にとって「日本的」であることが、事実上「文明的」であることとシノニムのように見えたのである。それは、明治維新以後、日本をモデルに韓国の改革派の知識人たちが、「日本的」なものを模倣することが、「文明的」なものに通じる早道とみなし

た時代を彷彿ほうふつとさせた。

韓国の行く先々で私の叔父のような「日本語世代」が、「脱亜論」の福澤諭吉を師と仰ぎ、まるで李朝鮮の改革（甲申政変こうしん）を企てた「急進開化派」の代表、金玉均キムオツキユンの末裔まつえいであるかのように、日本について熱っぽく語っているのが印象に残った。同時に、甲申政変後、日本に亡命し、不遇のうちに上海シヤンハイで暗殺される金玉均の運命にも似て、日本に対する愛憎が併存する屈折した心情が垣間見かいまみられた。おそらく、それは、「親日派」と括くくられていた軍事政権のトップ、朴正熙パクチヨンヒ大統領のアンビバレントな心情と通じるものがあつたのではないだろうか。

そこに共通していたのは、韓国が日本の後塵こうじんを拝し、一〇〇年経たっても近代化の「劣等生」という不名誉な境遇に甘んじなければならぬという不遇感であり、コンプレックスだった。それらが、大学生の私の中にも澱おひのように沈潜うつつしていたのである。そうした鬱屈うつつした感情を抱えた大学生の私が、初めて社会科学と出会ったのは、欧州経済史家として著名な大塚久雄おおつかひさおを通じてだった。同時に、私は彼を通じてマックス・ウェーバーという二〇世紀最大の社会科学の巨人のことを知るようになったのである。